論　壇

武井武雄の「心の旅路（インナー・トリップ）」

―『ラムラム王』と『あるき太郎』をめぐって―

Takei Takeo's "Inner Trip":
Reading his Fairy Tales, "Roi Ram Ram" & "Aruki Taro"

安田　　彰*
YASUDA, Akira

もくじ

1．はじめに
2．武井の幼年期
3．子供への共感と永遠の少年
4．『ラムラム王』『あるき太郎』に書かれたもの
5．相次ぐ子供の死
6．創作の転換と再出発
7．おわりに

1．はじめに

不世出の総合美術家（ジェネラル・アーティスト）・武井武雄（1894～1983）は童画家・版画家・造本美術家として著名であるが，同時に童話作家・詩人としても知られている。その作品内容は多岐にわたっており，絵画同様エキゾチックで奇想天外，詩想や物語の舞台展開はじつに幅広い。中でも主人公が旅に出て波乱万丈の出来事に見舞われ，思わぬ体験を重ねるという話も少なくない。

ところが，武井自身は旅らしい旅を多くはしていない。外国旅行に至っては，意外なことに生涯に一度しかしていない。それも1968（昭和43）年，74歳の年に，当時のソ連（現ロシア）の招きを受けて児童文化訪ソ団の団長として行っているきりなのである。

多くの作家・画家が，自らの詩想・情操を肥やし，創作のエネルギーにしようと出かける旅や旅行――武井はそれをさほどしていない。にもかかわらず武井の絵画・物語には西欧風もしくは無国籍ながら異国趣味溢れる舞台や情景が描かれる。

その創作世界は独りよがりのものではなく，現にいくつかの童話集の挿絵はヨーロッパの人々の共感と支持を得て，さまざまな賞を受けている。最近の話題ではドイツの出版社"TASCHEN"が武井の描いた『アンデルセン童話集』（1928年）の挿絵に感銘，85年余を経た新刊のアンデルセン童話集に計６枚の採用を決めたほどである（2013年10月）。

かくも豊穣にして詩情豊かな創作世界はいかに

＊本学経営学部教授

して武井の裡に齎されたのか。旅に代わる武井の創作の泉はどこにあるのか。そうした事情について，彼の生涯を振り返りつつ，旅を主題とした童話集『ラムラム王』（1926年）と『あるき太郎』（1927年）を読みながら考えてみたい。

２．武井の幼年期

武井武雄は1894（明治27）年，長野県諏訪郡平野村（現・岡谷市）に生まれた。家系は諏訪藩の士族で，父は初代村長という名家の一人息子であった。幼少期は病弱で，寝ていることが多く，友達と遊ぶことの少ない生活であった。したがって外へ出られない分，絵を描いたり，読書をしたり，俳句を作ったり，空想に耽ったりすることが多かったという。

武井はあるインタビューに応え，幼年時代をこう語っている。

「僕は病弱でしてね。どうも一人息子で過保護だったんじゃないかと思うんです。いつもノドをはらしたり，ロクマク（引用者注：肋膜炎）になったり，疑似セキリになったり……。それで食べ物も制限され，お菓子もダメ，カキやスモモといった果物もダメ，トウモロコシも消化が悪いからといった始末。それでもう，方々の家の子供の食っているものを食いたくてしょうがなかったんですね」(注１)。

また，長女の武井三春（1928～）によると，幼少の父・武雄は「連翹の花の，あまりにも黄色いのを見てびっくり仰天したほど，外を見ることも少なく部屋の中にいることが多かった。そのためか，友だちもなくいつも孤独だったので，近所のお婆さんが来ると簪（かんざし）や手拭いを抜き取っては帰るのを引き止めたりする甘えん坊だった」という（武井三春「ミト」『父の絵具箱』）。

さらには，「父の一番古い記憶は，満三歳のころ，糸紡車のそばの陽の当たった畳の上に木版摺りのおもちゃ絵をひらりと置いたら，立ち昇ったほこりが陽を受けてキラキラキラキラと光った。ただそれだけの感覚的な一瞬の情景であるが，部屋は南の６畳と，その位置まではっきりと覚えているのだった」（同上）とあり，武井の繊細で視覚の印象のつよい，またそれをいつまでも焼き付けうる性情が紹介されている。

続けて，同じ三歳頃，梯子を上って諏訪湖越しの山の端に落ちる夕陽を見てのエピソードが興味深い。「その時突然，／「今日のお日様がなくなってしまう！」／と言って泣き出し，驚いてとんできた祖母が／「お日様は沈んでもまた明日も明後日もきっと同じようにでてくるので，決してなくなってしまわないから，心配しなくていいんだよ」／となだめすかしたが，それでも今日がもうなくなってしまうと言い張って泣き止まず，真暗になるまで梯子につかまっていたそうだ」（同上）

こうした感受性過多の病弱な子が，空想上の友人を作り出すのは時間の問題だ。早速「ミト」という存在を造作した。

「ミトとは，父が自分で考えだした小さな妖精であり，空想の神様のようなものだった。ミトは父の寝ている布団の衿に出てきたり，林檎の木に登っている時やって来たり，舐めている金平糖の芯から飛び出して来たりと，逢いたい時はどんなところへも出て来てくれた」（同上）

あるいは武井自身，上述のインタビューに応えてこう言っている(注２)。

「――武井先生の幼い日の“妖精ミト”との特異な話は，武井作品の芸術，メルヘンの原点ともいわれていますが，このミトについて。

武井　学校へ行かない年，つまり小学校二年生の時なんか，僕は病弱で２か月しか学校へ出ていないんです。それでも昔だから単位が足りないなんて言わず進級させてくれました。とにかく小学生の頃だいたい弱かったんです。それが“ミト”

につながるんです。

その頃，僕は戦争ごっこやいろいろやって外でも遊んだんですが，大部分は家で寝ていたものですから，友達が比較的ないわけですね。ですから自分で友達をつくったんです。それは空想的な人物でして，どういう顔や格好をしていて男か女かということも全然わかりませんが，ただ抽象的な人物を自分の中でつくっちゃったんです。これがいわゆる“妖精ミト”なんですね。

それがあらゆる場合に呼べば出てくる。庭にリンゴの木なんかがあって登っていると，叔母が「ミトが来ているよー」って呼ぶとだれと遊んでいてもとんでいっちゃう。時にはコンペイトウの芯からポイッとミトが出てきたり，そういう空想的なものをつくって，それと毎日遊んでいたということですね。多分，夢の中でそいつが出てきて「俺がミトだ」と言い，それでメルヘン的なものを自分で創造しちゃったわけなんですね。当時は，今ほど雑誌もないし，親戚の人が夏帰省してくる時，金港堂でお土産に子供の本を買ってきてくれる程度で，あまり文化財に恵まれていなかったんです。だからミトは自分が勝手につくった僕の心の中の友達だったわけです」

3．子供への共感と永遠の少年

こうした病気がちで腺病質な子は，空想力を逞しくして自分の世界に閉じこもることを好むが，学齢になって徐々に健康的になると，こうした世界への関心も薄らいで，健常な子供に育っていく。「ミトは小学校の三年生ぐらいになると来なくなった」（同上インタビュー）のもそのためだろう。病弱多感の幼年期を送った武井も中学進学後から体力的に強靭になった。岡谷から諏訪湖を半周して片道８㎞の道を通学したこともあって，体は丈夫になり，運動も交友関係も充実した。北原白秋や竹久夢二，西條八十らに親しみ，短歌や俳句もつくっている。

その後東京美術学校（現東京芸術大学）に進学し，フランス留学を終えたばかりの西洋絵画の先駆者たる教授たちに学ぶこととなる。黒田清輝，久米桂一郎，藤島武二，和田英作ら，日本の西洋絵画史に不可欠の錚々たるメンバーだ。

過去の歴史の圧しかかる郷里の暗い家から抜け出し，なんとか明るく新しいものをと模索していた武井にとって学ぶことは多かった。絵画そのものはもとより，留学経験こそなくてもフランス帰りの教員からフランス語を学び，学友との交流も音楽をはじめ幅広く，武井自身もマンドリンを習ったりして，大正時代特有の教養主義的なハイカラ趣味に染まっていたようである。

しかしながら，卒業後の生活はままならず，早くに結婚はしたものの，なかなか安定した仕事に恵まれなかった。売り物ではない油絵を描く日々，貧乏のどん底に，たまたま持ち込まれたのが子供のための絵を描く仕事であった。中学校同級生の紹介による牧師の野辺地天馬である。彼は婦人之友社の『子供之友』の編集もしており，その絵の依頼を持ってきたのである。武井はこの恩義を忘れず，野辺地の依頼には生涯無償で絵を描いたという。

当初は生活のためにアルバイト感覚で描いた幼児向けの絵――それがやがて男子一生の仕事として取り組もうという決意に代わっていく。

そのきっかけは1922（大正11）年，武井28歳の年に創刊された絵雑誌「コドモノクニ」であった。たまたま自作の売り込みに行った東京社で和田古紅と出会い，氏に認められた武井は，この雑誌の創刊から関わることになり，企画・編集から表紙画・題字までを担当し，当時の子供たちに長く親しまれる絵本作りに携わることになる。

幸いなことにこの時期の日本は児童文化のルネサンスともいうべき時代で，「赤い鳥」や「金の

星」といった質の高い児童雑誌が相次いで創刊されていた。ただ，その中心はあくまでも童話であって，挿絵はその添え物といった位置づけで，一流の画家たちも副業的に割り切って描いていたといえる。そんな風潮に対する反発や武井自身の幼時体験もあって，彼はますます「子供の魂に触れる絵」を目指すようになる。

かくして生活基盤の安定した武井は，「コドモノクニ」の好評から，同社の「婦人画報」や「少女画報」，さらには「週刊朝日」，「サンデー毎日」等にも執筆するようになる。武井は絵のみならず，詩や童話にも筆を染め，幅広い活動を展開する。そんな最中，1926（大正15）年，武井32歳の年に書かれたのが長編童話『ラムラム王』である。

４．『ラムラム王』『あるき太郎』に書かれたもの

この童話は，従来型の子供向けのおとぎ話や情操教育を意識して書かれた作品というよりは，一見，奇想天外のナンセンス物語，荒唐無稽の奇行譚といった趣の強い話である。主人公の生誕から始まるこの一種の自己形成小説（Bildungsroman）は，幼いうちから旅に飛び出し，さまざまなものや人と出会い，別れ，壁を乗り越えて自分自身を形成していくという，いわば近代文学の典型的なパターン・系譜を踏んでいる。

ただその描かれ方が，現実世界とは異なる夢とおとぎの世界であって，その交渉ややり取りも空想とナンセンスに徹している。とはいえ，思いつくまま，口から出まかせというのではなく，武井自身の読書体験，知識の泉から紡ぎだした物語の設定であり，展開である。

たとえば長寿を願ってつけられた長い長い名前をもつ主人公ラムラム王は，大工ヨセフの子・イエスが厩で生まれたように，エッペ国に住む「貧乏な珊瑚削りの仕事場の隅のぼろの中」（武井武雄『ラムラム王』）で生まれる。

新語づくりの名人武井がつける主人公の正式の名は「フンヌエスト・ガーマネスト・エコエコ・ズンダラー・ラムラム王」という長いものだが，落語の「寿限無」にヒント得てのものに違いない。王と名がついていても王様でもなんでもなく，単なる貧乏人の名に過ぎないとダメ押しが入る。ラムラム王は変身の術を心得ていて，７歳頃からさまざまなものに化けては親を驚かすもので，母親に気味悪がられ，「小さいながらもなつかしい自分のすみかを追い出されること」（同上）になる。ところが「ラムラム王のほうでは一向平気なもので，悲しみもしなければ驚きもせず，散歩にでも出るような調子でぶらぶら出かけて」（同上）行くのである。

このくだりは翌1927（昭和２）年，武井33歳の年に書かれた画噺３部作の一つ『あるき太郎』の旅立ちと共通するところがある。

こちらの出だしはこうだ。

「みなさん　さあ　よういは　できましたか。あるき太郎がいま　きしゃに　のります。いっしょに　たのしいたびを　しましょう。（中略）　では　いってまいります。パパも　ママもごきげんよう」（武井武雄『あるき太郎』）。

この（中略）の部分には，これから出かける旅はどこにいても気軽にできる“心の旅路”だよ，と訴えかける文章がこう書かれている。

「みなさんが　もし　ストーブのそばの　いすにいても，すずしいこかげに　すわっていても　また　よるのベッドのなかにいても，りくや　うみや　そらの　どこへでも　あるき太郎は　みなさんと　いっしょに　たびをします」（同上）

この両者に共通するのは旅へのつよい誘いで，旅がもたらす未知の世界，自分を変えてくれる新しい知識や体験が待ち構えているという確かな信念である。

こうした信念は武井のどこから出たものであろ

うか？

岡谷市の版画家・増沢荘一郎氏による生家でのインタビュー(注3)の中で，武井は彼の芸術作品と生家との関わりに触れ，封建的な旧家に生まれたが故に新しいものへのあこがれが人一倍強かったのだと力説する箇所がある。

武井は武士の家系で，暗く封建的な匂いのする生家が嫌だったという。病弱で寝ていることの多かった多感な子供には，古くて格式を重んじる家風や家の佇まいが重苦しかったことは容易に想像できる。父母は一人息子を歯科医にしたかったようで，小学校一年の時に「将来は絵描きになる」と書いた作文を見た担任の教師が将来を案じて両親と話し合ったり，さらには美校に進学するという中学生の息子の進路について，当時の郡視学であった久保田俊彦（のちの歌人・島木赤彦）の意見を聞いたり，さらには諏訪高女の初代校長に助言を仰いだりしていた。幸いにして島木赤彦は，子供は自分のやりたい道に進ませるのが一番という意見で，結果として父親もこれを追認したのであったが，息子の将来を心配する親としてはこれらも当然の動きであったとはいえ，武井にとっては自分の進路に干渉する余計な力，大人の横暴と取ったのも無理はなかろう。

そうした背景に加え，いわゆる大正デモクラシーの動き，大正ルネッサンスともいうべき文芸運動や，白樺派の自由と自我の独立を目指すハイカラ趣味，西洋への憧れといった時代の流れも大きく掉さしたにちがいない。

自我の伸びようとする方向に反対する大人たちのベクトルを強く感じた武井は，その反発を強め，自らの不遇と境遇を「暗く封建的な生家」に象徴させたのである。

こうした武井の心情を踏まえ，改めて『ラムラム王』と『あるき太郎』の冒頭を見てみよう。初めての童話創作の中に「旅立ち」が取り上げられ，親の心配も温かい生家への未練も全くなく，のびのびと親元を離れていくという設定は首肯される。武井自身の旧弊からの解放という希求が，旅立ちという形で表現され，内容も記述のとおり，一種の自己形成小説（Bildungsroman）という形をとるのである。

興味深いのは，旅立ちの動機である。

まず『あるき太郎』をみてみよう。挿絵を見ると，小学校低学年と思しき少年が，大きな立派な旅行鞄を二つもぶら下げて，停車場へ急ぐ旅姿である。

鞄を下げて出かけた太郎は，ポッポステーションからハトの運転する列車にのり，波止場からアヒルの船長の船に乗る。挿絵を見ると，日本の船ではなく，Impératrice de RRR（女帝ラムラム）と船体にフランス語で書かれたハイカラな船だ。RRR は Roi Ram Ram（ラムラム王）である。このあたりにも武井の異国趣味が表れている。着いた島が小人島，スィフト（Jonathan Swift, 1667～1745）の『ガリバー旅行記』の一節を思わせるが，やがて小人の船２艘を借りて，スケートよろしく海を滑り出す。このあたりの奇想天外ぶりは武井の独擅場である。やがて出会う船が Golden Bat 号。今度は英語圏の船である。

さて，旅の佳境はここから始まる。船に乗り込んだあるき太郎は，ここで初めて旅の“目的”に出会うのだ。

「あるばん　はねのはえた　こどもが　たくさん　とんでいくのを　みました。さては　あのほうがくに　いいくにが　あるに　ちがいない」（武井武雄『あるき太郎』）そしてそれを追いかけ始めるのである。

陸に到着するとまず自動車に乗る。サルの運転する Monkey the Great Co. Ltd. のオープンカーだ。ところがドクトル･シャッポー（Dr. Chapuau）先生の強力磁石実験に引っかかり，吸いつけられてしまう。代わりに木製の自動車をもらうが，こ

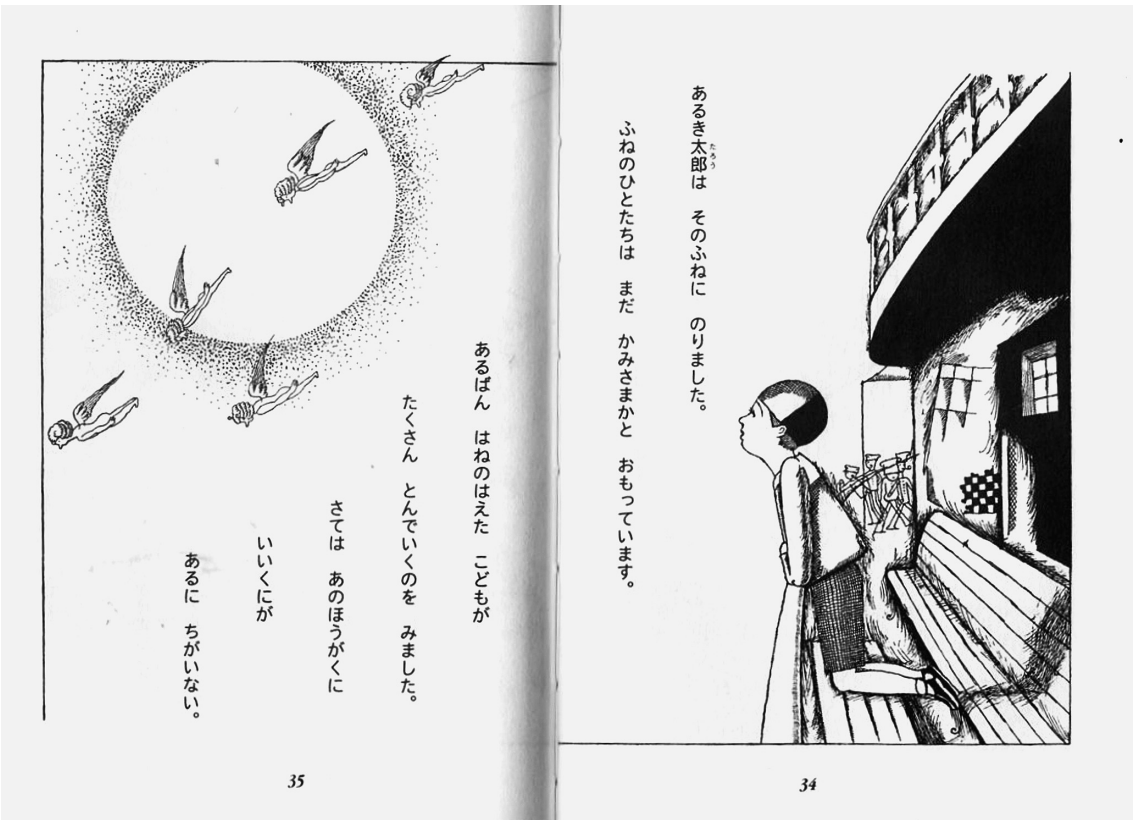
れがのろのろ。太郎はラムラム王よろしく魔法をかけて，オートバイ，自転車と乗り物をかえつつ，山頂の王国につく。

「ごてんの　にわへ　きてみると　おおきなきのうえに　はねのはえた　こどもたちが　いっぱい　ちゃちゃ　ちゃちゃ　と　さわいでいます。**おやっ，これだ　これだ!!**」（同上。ゴシックまま）

ところが大声に驚いた「はねのあるこどもたち」はぱっととびたってしまい，太郎はまた彼らを追いかけ始めることになる。女王様が差し出してくれた飛行機に乗り，太郎は紆余曲折の末，月の国にたどり着く。月の国で休んでいた子供たちにたどり着いたものの，つるつるの月にはうまく止まれずに滑り落ちて下界に墜落。ここから乗りものを捨てた太郎が歩き始めるのである。さまざまな足の速い男たち，あし太郎，かぜ太郎，てっぽうだま太郎等と出会い，一緒に歩き，競争するうちに彼らを超える俊足を身に着けてしまう。

そして我が家に戻ってみると「ところが　ふしぎ　ふしぎ　はねのはえた　こどもが　おうちのにわへ……」こどもたちは花壇に飛び込むと花になってポツリポツリと咲だす。「そうだそうだ，あのこどもたちは　おいかけなくても　はるになると　ひとりでにぼくのにわへも　やってくるんだ。」（同上）

これは M. メーテルリンク（Maurice Maeterlinck, 1862～1949）の『青い鳥』譚である。また，ところどころに『ガリバー旅行記』をはじめとする他作品からのヒントや類似がないではない。しかし全体を通しては，武井の奇想天外，時としてナンセンスな文と絵の織りなす徹底した武井ワー



『あるき太郎』より「はねのはえたこども」を見る（出所：武井武雄『あるき太郎』銀貨社）

ルドになっている。そうした視点で見ると，この「はねのはえたこども」は“青い鳥”と見るよりは，武井が小学校三年生まで空想の中で一緒に遊んだ“ミト”と見るべきであろう。

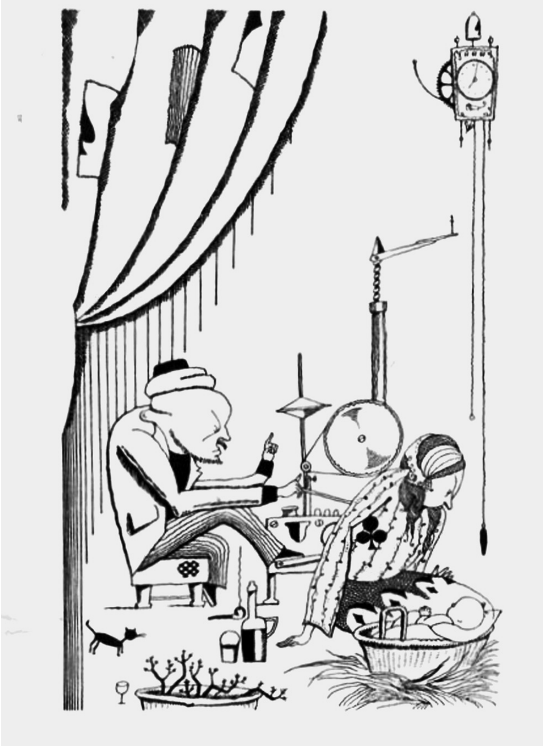
苦しかった耐貧生活を乗り越え，子供も生まれ，仕事も増えて安定し始めた30歳代前半。『あるき太郎』は武井の少年時代に，幼い子供たち（当時４歳と３歳の男児）を重ね，自身の夢の回想と希望を託した作品であったろう。最終ページに描かれたあるき太郎の帰宅を喜ぶ両親の挿絵が，ちょび髭を蓄えた武井自身と若き妻・梅そっくりなのも微笑ましい。この童話は，武井が丈夫になって小学校三年からもはや現れなくなったミトへの感謝と賛歌（オマージュ）と言っていいだろう。

一方『ラムラム王』である。この作品は，『あるき太郎』発刊の１年前にかかれた，ある意味武井文学の処女作ともいうべき重要な位置づけを持つ作品である（以下，引用は武井武雄『ラムラム王』）。

第１章はもともと完結する掌編童話として書かれたようで，上述のようにラムラム王の変身を気味悪がる母親によって「追い出される」のであるが，読者好評のためか第２章以降第８章までが書き継がれることになる。第１章では，母親に追い出されたラムラム王が，巨人国の王様に出会い，鉄の箱に閉じ込められていた自分の半身と再会，本来の姿を取り戻し，巨人国の王子として何不自由なく暮らしていたが，「時々もとの小さい体がこいしくなる」ので，小人に変身して木の枝に腰かけていたところ，急に立ち上がった巨人のせいで，曲がった枝が跳ね上がり，空の彼方に飛ばされてしまう。そして再びエッペ国の珊瑚削りの仕事場に落ち，オギャーと生まれて，話は振出しに戻るのである。

では第２章はどうか。今度は年老いて授かったラムラム王を父は可愛がる。ところが生まれた時に，言い伝えのカードが窓から舞い込む。白いカード５枚，黒いカード１枚である。白なら王様，黒なら奴隷という。このカードがラムラム王の将来を決めることになる。今回も11歳の年にラムラム王は「またふらりと家をでかけて」しまう。それは夢を見たせいである。「西の方へ旅をすると，黒燿石（こくようせき）の小さな釣針がある。それが見つかったらお前もはじめて生まれてきたかいというものがわかるだろう」というものであった。ラムラム王は夢の翌日即旅立ちをする。それも両親をさておき，11歳の少年が「生きがい」探しに旅立つのである。

この章からはカードの予言通り，４つの王国の王になり，ひとつの国では奴隷にされてしまう奇譚が語られる。そのいずれもがいわば荒唐無稽に面白く，馬鹿げて楽しいお話ばかりである。まず隣国の「磁石国」にやられっぱなしの王様が，仕掛けられた知恵比べの戦争にラムラム王の頓智で



『ラムラム王』第一章より　（ラムラム王誕生の場面）
（出所：武井武雄『ラムラム王』銀貨社）

圧勝する。ラムラム王は王位を継承し人望を集めるも，ある日うっかりと腰に挿していた短剣のせいで「磁石国」に吸いつけられ，空を飛ばされてしまう。時に15歳であった。

３章は，空を飛ばされたラムラム王が「磁石国」についてからの話だ。大磁石に吸い付けられたお姫様を馬車から助け出し，大勢の磁石に吸い付けられた人々をすくって，このギニビヤ姫の故国に帰り，二人は結婚，２枚目のカードの予言通り王位に就く。ところがラムラム王は相変わらず夜な夜な黒燿石の釣針の夢を見る。ギニビヤ姫には後ろ髪をひかれるものの，この思い達成の力は強く，ひとり御殿を抜け出すのであった。

４章は波止場から船に乗り，西へ向けての旅立から始まる。船名はゴールデンバット号，『あるき太郎』と同じ名前の船だ。ところがこの船には怪しいボーイが乗っていて，彼のコーヒを飲んだ旅客は次々と海に飛び込んでいく。ラムラム王は海藻の匂いのするコーヒを飲むと同時に変身術を使ってゴム人形に化け，海の底へと謎解きに行く。そこには六萍（ろくひょう）という毒の海藻が密生しており，昨日まで船に乗り合わせていた乗客が鬼にされて漂っている。ラムラム王は城に住んでいるこの六萍の精を知恵比べで退治，心を入れかえさせて３度めの王位に就く。しかし旅を急ぐラムラム王は善人になった妖婆に後事を託し，再びゴム人形となって海洋を漂ううち，「日本郵船の箱根丸」という船に拾われるのである。

５章では，この箱根丸が「いやに機械ずくめで妙に文明の臭いがする」のがいやになって，ラムラム王は再び月夜の海洋に飛び降りてしまうところから始まる。やがてたどり着いた孤島は「時というものが昔のほうへほどけていく」国であった。ラムラム王はエッペ国の隣人の時計屋・チックタックと出会い，ここで初めて今までの旅が「浦島太郎」のようなもので，時間の物差しが代わっていたことに気付く。

ところがパクイクイという大蝙蝠にさらわれてしまう。身の危険を感じたラムラム王は，青銅の鏡に変身するが，これが「一生一ぺんの命がけの時」となる。パクイクイの取り落とした鏡は，岩角に当たり，砕け散ってしまい「ラムラム王の命はもうとても見込みがあろうとは思えませんでした」という事になる。そこへ，通りかかった商人が，きれいな青銅のかけらだと拾っていく。これをつなぎ合わせるよう依頼を受けた魔法使いが直ちにラムラム王と見抜き，必死に再生の術を凝らす。しかしなかなか蘇らない。この辺の描写はまさに迫真の文章である。長くなるが引用する。

「それからものの二時間ほどもグジャグジャ何か唱えていると，鏡は静かにラムラム王の姿に変わってきました。しかし顔は青ざめて唇は紫色に，手も足も氷のように冷たく，もうすっかり固くなり切っていました。（中略）魔法使いもしばらく首をひねっていましたが，／「もう，とてもだめだ」／とつぶやいて悲しげに眼を閉じました。けれど体を順々に撫（な）でていくうちに踵（かかと）のあたりへ来た時，急に輝いた顔になって，／「ああ，踵のすじがまだ一本いいようだ」／と言いながら魔法使いは急いで六萍の国の老婆を呼びよせました。魔法使いだけあって意外な離れわざをやるものです。／お婆さんは卵を育てる水を片手にさげて走ってきました。そしてその水をラムラム王の額（ひたい）のところへひっきりなしに垂らしました。一方魔法使いは片手で踵のすじを揉（も）みながら片手で脈を握っていました。蝋燭（ろうそく）がジージーいって燃えているほか，静かな時が続きました。やがてラムラム王の唇にはかすかに薔薇色（ばらいろ）がさしてきたように見えました。この時です，魔法使いがいきなり，／「脈がうってきた」／と叫びました。老婆はラムラム王の耳に口をつけて／「ラムラム王様！　ラムラム王様！　しっかり遊ばせ，婆が昔のお礼にまいっておりますよ」／と叫び続けました。／ラムラム王はこの時はじめてわずかに細く瞳を見開

きました。そして，唇にはいつの間にかそよ風のような微笑がうかんできました」。

感動的な蘇生の描写である。長文を引用したのには理由がある。

武井が11歳の時，元気になったはずの彼を病魔が襲う。医者も見離し，両親もあきらめかけた時，不思議な夢を見て，いったんは渡ってしまった彼岸から現実の此岸に引き戻され，九死に一生を得るという体験をしている。『ラムラム王』のこの部分の描写はその時の体験を踏まえているに違いない。長女の三春はこう述べている。

「父は満十一歳の時，急性腎臓炎から尿毒症になり，十二回もひきつけを起こし，御医者様も両親もこれまでと匙を投げたことがあった。意識がだんだんなくなってゆく時，名を呼ばれてもどされたのを覚えているそうで，危険な状態を脱する時，ひとつの夢を見た。それは明るくはっきりした夢で，障子に緑色の唐草を描いていた。その朝から快方に向かったという」（武井三春「ミト」『父の絵具箱』）

こうしたことを踏まえると，このシーンは，自身の幼少年時代を色濃く投影した個所だといえるだろう。

さて，６章だ。元気になったラムラム王は，左足の小指がないのに気付き，その青銅のかけらを探しに墜落した場所にやってくる。ところがそこでこの王国の番兵につかまる。王様と「物試し」の勝負をして，見事勝ちぬいたラムラムはピッピ王から４度目の王位を継承，そして敵国の侵略戦争を処理するも，未練のかけらもなく，さっさと再び西への旅に出る。そして旅立ちから12番目の夜，ラムラム王は「お星さま」と出会い，湖畔の「くらげの面ホテル」の一等室へ一緒に泊まる。食堂で星は夕食に「とろろと蛍草（ほたるぐさ）に角砂糖」を注文する。そして食べながら「僕は流れ星だからね」といってにやりと笑う。このあたりの描写は奇想天外で面白い。

７章は，ホテルのベッドでの二人の会話だ。星がホテル代の心配をするところが微笑ましい。ラムラム王と違ってどこでもタダで済ませるのではなく，「花のかげで蟋蟀（こおろぎ）にタランテラを踊らせて，旅人からいくらかのお金をもらう」のだそうだ。タランテラはイタリア南部のテンポの速い舞曲で，こうしたさりげないエピソードの中に武井のハイカラ趣味を忍ばせている。この章のハイライトは二人のかわす人生論であろう。ラムラム王が，自分の生まれがいを見つけるため，黒燿石の釣針を探して，西へ西へと旅をつづけているというと，星はこういう。

「……人間の生まれがいなどというものはひょっとすると一本の釣針くらいに引っかかっていないものとも限らない。星にはそんなことは一切わからない。ただ君の一生のことだけはわかっている。（中略）だがそれを言ってしまうと君のその生きがいという奴が無くなってしまうからやめさ。（中略）君は王様だとか旅人だとかいうものの眼からだけしか地上を見てはいないのだ。今度はラムラム王などという名前も捨てて，ただ一匹の獣（けもの）となって，この地球の上を頭を低く垂れて這（は）ってみるがいい」

この個所こそが本編の急所であろう。

そろそろ終盤戦に入ったお話は，長めの７章の後半部分で，空，地，水の三界巡りのポイントが語られる。空ではパクイクイの懺悔と謝罪を聞き，神に懐いて遊ぶ動物の世界に感心したりする。羊になったラムラム王が，草を食んで涎を垂らす牛に「生きがい」を尋ねると，「生き貝」と勘違いして海にいるだろうと答えたものだから，すぐさま魚になって水に飛び込んでしまう。海中でラムラム王が見たものは，大きい魚，小さい魚のやり取りで，ちょっとした寓話が紹介されている。ロシアの小説家・詩人Ｆ・ソログープ（Фёдор Сологуб, 1863～1927）である。大学ではフランス語を学んだ武井であるが，ロシア語は堪能であ

ったとは思えないので，この詩の引用は翻訳を通してのことと思われる。後年，74歳で初の海外旅行を経験し，ソ連（現・ロシア）を訪れることになるが，ロシアへの関心が若い頃から芽生えていたことを窺わせ，興味深い。

さて，かくして魚になったラムラム王は，ある日目の前にぶら下がった念願の黒い釣針に無我夢中で取り付き，陸に引き上げられる。

いよいよ最終章・８章である。ラムラム王を釣り上げたのは宮廷の煙突掃除人ヘボンであった。彼は三度の飯より釣りが好きという人物で，念願の宮廷の御物・黒燿石の釣針を借り受けて釣りをしていたら，あろうことかラムラム王を釣り上げたのである。危うく料理されそうになったラムラム王は，変身の術をかわれてヘボンの奴隷となる。カードの予言通り一回の奴隷経験である。宮廷晩餐会の開かれるある日，女王様に差し上げるはずの大切な盃をヘボンが割ってしまう。彼の命令でラムラム王は琥珀の盃に変身，女王様の唇がつくや否や，ラムラム王はもとの立派な姿に戻る。すると，あろうことか女王様は実は愛しいギニビヤ姫，二人は再会を喜んで再び結ばれるという大円団を迎える。めでたし，めでたし。

しかし，一筋縄ではいかないのが武井の物語展開，さらに後日談がある。二人は末永く幸せに生きたのち，ギニビヤ姫は御隠れになり，すぐにラムラム王も姿を消す。手分けして国中を探したところ，「無言の人」と呼ばれる木の塔に遺書が見つかる。「1894年六月二十五日，日本の国の山の中の　小さな湖のほとりに生まれ変わるまで　私のゆくえを探してはくれるな／ラムラム王」というものであった。さらに武井は言う，この話の続きを知りたいのならこの生まれ変わりの人，すなわち同じ誕生日の作者である私を探すしかない，というものである。

以上話の展開を追って，『ラムラム王』を見てきたが，ここで話のキーである「黒燿石の釣針」を再検討してみよう。

魚に変身して顎に引っかかった釣針は，奴隷になったラムラム王がこっそり外してみると，「三センチ四方くらいの象牙の板」に変わっていた。そこには細かい文字でこう書かれていた「・神様のいらっしゃる所，番地」という見出しがあって「たとえば花の雄（お）しべと雌（め）しべとの根もとを割ってごらん，そこにいらっしゃらなかったら虫眼鏡（むしめがね）で覗（のぞ）いてごらん。美しいものや感じたものがあったら，しるしてごらんなさい。またえらい聖人の教えに手を合わせていると，いつかお姿が見えることがあるかもしれない」

そもそも『ラムラム王』の釣針探しは，夢の託宣「生まれてきたかい（甲斐）」の発見から始まっている。冒頭，この童話は一種の自己形成小説（Bildungsroman）だといった所以である。したがって最終章で明らかにされた託宣は作者・武井自身の信条にほかならない。ラムラム王の口を借りて書かれているのは「学問でいろいろの不思議を調べること」「絵をかいたり歌を作ったりしてもまた神様に近づける」という事であり，「いつか何の知恵もない獣の世界にも神様が遊んでいらっしゃるのを見た」という思い出である。言いかえると，武井が生きがいと見ているのは，「知・情・意」の駆使による「真・善・美」の実現である。科学・学問の重要性，芸術を通した感性や情操の充実，平和と信仰による善の実現である。

ようやく30歳になるかならぬかの年齢で，武井は自らの生きがいというものをしかと掴んでいたことになる。なぜなら，当初児童雑誌『金の星』に掲載されたこの話を，武井は後年単行本化し，もちろんテキストの手直しや挿絵の書き換え等はあったものの，戦後40年近くを閲した70歳になっても私刊本シリーズ「刊本作品」の55番目として再刊している。並々ならぬ本書への思い入れを見ても，単なる子供向けの童話という範疇に留まら

ぬ熱い信条が吐露された作品といえるだろう。ラムラム王＝武井自身という確信は，本書の刊行以降使われるようになったRRR（Roi Ram Ram）のサインを見てもよくわかる。それまではTA, Ta, TAKとかさまざまであった。まさにRRRとは自己同一性の証であったのだ。

しかしながらここで重要なことは，その早くからの志や念願を生涯にわたって持ち続け，強い火を燃やし続けられるかどうかである。多くの芸術家が，初心を貫徹できずに後年挫折してしまう例は枚挙に暇がない。初志貫徹の燃料は往々にして途切れることが多く，またマンネリズムから脱却すべく，新たにくべる薪を探して画家や作家は煩悶し，模索する。そして多くの場合，自らの感性や感受性の新しい刺激と変化を求めて「外」に働きかける。具体的には，旅であったり，留学であったり，親しい仲間との交遊・交流であったりする。古くは隋・唐へ，新しくはフランス等西欧への渡航や留学，あるいは古えの歌人・俳人の歌枕を求めての紀行や放浪，流浪を含む旅である。

ところが武井は，耐貧生活という事もあってか，若い頃はほとんど旅行をしていない。また余裕の出てきた壮年期以降も，仲間との慰労や娯楽としての国内旅行程度で，まったく海外旅行をしていない。唯一の例外が74歳にして初めて体験したソ連（現・ロシア）への旅だけだ。

武井はいかにして詩想や画想を磨いていたのだろうか。武井は本来好奇心に富み，それゆえ大変な勉強家でもあった。多くの書籍や画集から学ぶことが多かったことは想像に難くない。しかし，まずそれ以上に自身に厳しく，幼い頃の体験や信念を折に触れ反芻している。

先述した，武井の一番古い記憶である，おもちゃ絵に陽の当たった埃のきらめきについても，「十歳のころ，ああ，まだあのことを覚えているなと思い出し，大きくなるにつれてもたびたびこのことを思い出していた」（武井三春『父の絵具箱』）とある。

また「今日のお日様がなくなる」エピソードについても，やはり「大人になっても，自然に対する新鮮な驚きや感動が薄れたと気づく時は，この今日のお日様がなくなるという感動と大発見を思い出しては，／「俺よ，老いるな」／と自分を励ますのだと話していた」（同上）とある。

大事なことは武井が，病弱ゆえに敏感になっていた幼少時の稀有な体験や感動を折に触れ反芻していたという点だ。

現に武井自身その重要性や重みについてはしかと確信していて，こう言っている。

「幼児の間に知らず知らずに培われた本感覚というものは，一生を支配するといってもいい」（「絵本」『本とその周辺』）あるいは「空想は現実の母である」（同）といって自らの想像力を信じ，錬磨している。そうした成果として，次のような心情を生涯にわたって保持することが出来たのである。

「経験のない新しい形式と取り組むとき，処女地に初めて鍬を入れようとするとき，そこには喩えようもない少年らしい希望と闘志が湧いてくる」（「本の表現形式」同）

5．相次ぐ子供の死

ところが，仕事も軌道にのり，３人の子供にも恵まれた幸せな武井を思いもかけぬ不幸が襲う。母の死に次いで，1938（昭和13）年には次男を失い（享年15歳），翌年には三男（享年14歳）を相次いで失うことになる。残されたのは10歳になる三春ひとりであった。当時を回想して，長女の三春はその頃の武井の様子を後年こう語っている。

「父の一生の中で昭和十三年からの十年間（引用者注・焼け出され一切を失った太平洋戦争の時

期を含む）がなかったらどんなによかったかと思う。（中略）　兄二人が続いて亡くなった時，疲れ切った表情の父は小さかった私を抱くようにして，

『結核なんかに負けるんじゃないよ』

と静かに，心の底から言い聞かせるような口調で言った。その時，父の頬に，片方の目からほんの少しの細い涙が伝わったように見えた。私が父の涙を見たのは，長い一生のうちでこの時一回だけで，今でも人間は片方の眼から涙を流すことができるのだろうかと不思議に思っている。父は，悲しみを紛（まぎ）らすために没頭して制作した鎌倉彫の箱に，／無一物・無尽蔵／という言葉を彫りつけている」（「苦悩の時」『父の絵具箱』）

この鎌倉彫は，二人の男の子の顔と立像が彫られているいわばオマージュ作品で，悲しみは拭い去れなかったであろうが，無心に刀を進める単純作業が，瞬時悲しみを忘れさせてくれたに違いない。

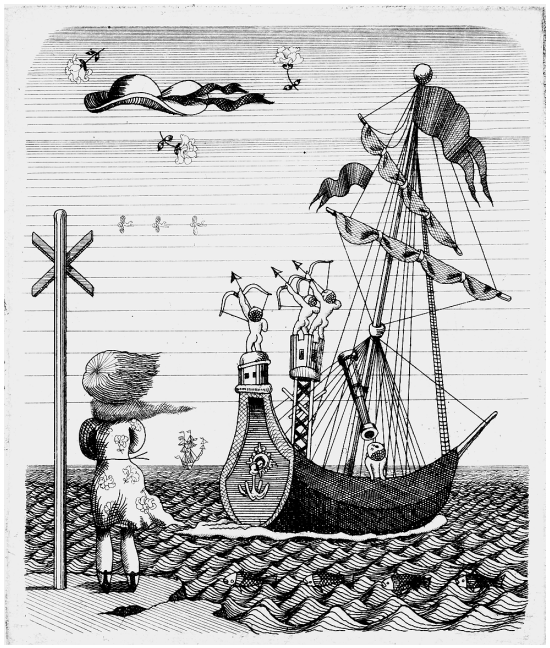
武井は，失意のどん底でこんな喪失の詩を書いている。

空想

夢はしゃぼん玉の様に
はじけてしまう。が
空想の子は飯を食うのか
やがて成人して未来に
号令をかける。
弄ばれたまま人間に見離された
空想の子供は　千切れ千切れに
空を飛んでいる。

（銅版画絵本『地上の祭』より）

この詩は次男の亡くなった年から３年がかりで刊行された銅版画絵本の傑作『地上の祭』の冒頭近くの作品である。これに配される銅版画はこうだ。



銅版画『地上の祭』より「空想」（イルフ童画館（長野県岡谷市）所蔵）

岸辺に立って船を見ている少女の帽子が空高く飛んで舞い，それをめがけて３人の羽のない裸の天使が船の高みから矢を放っている。放たれた矢はきれいな花と化して帽子を取り囲む。強い風になびかれて佇む少女は，武井の唯一残された子供・長女の三春ではなかろうか。その後ろ姿は寂しげだ。そして，これは筆者の想像なのだが，この矢を放っている羽の無い裸の天使こそ，「ラムラム王」や「あるき太郎」に描かれるミトなのではないか。

また，後年武井は「がんがらがん」という詩と絵を描いている（1968年，武井三春『青の魔法』）

がんがらがん
がんがらがん
悪魔の目玉は
踏みつぶせ。
がんがらがん
がんがらがん

嘘つき野郎は
叩き出せ。

がんがらがん

絵はパステルかクレヨン画のようで，悪魔と思しき青と赤の怖い眼玉を10人の男の子が取り囲んで「がんがらがん」とやっつけている絵である。幼い男の子はみんな裸，羽のない天使のように愛らしく，手に手に楽器をもってらんらんと光る眼玉に向かって鳴らしている。

この子たちもやはり悪魔と戦うミューズすなわちミトなのではないか(注4)。

私見によれば武井にとっての天使像は晩年まで，ミトと重なる。病弱の幼少期に遊んだミトは，失った武井の子供たちの蘇り・分身となって，さらにはあまねく世界の子供たちの守護神として，武井の裡に生き続けたのではないだろうか。

6．創作の転換と再出発

失意のどん底の武井を奮起させたのは2通の手紙であった。

武井はこの失意と絶望の淵から這い上る経緯となったエピソードを後年いくつか語っている。ひとつは「コドモノクニ」で児童画の選をしていた頃の話で，その入選常連の中学生からの突然の手紙だ。日中戦争が激しくなっていたころである。

「先日の新聞の戦死者名の中に武井武雄というのを見た時，私はドキンとしました。もしもこれが私の大好きな先生だったら。そして先生が支那の兵隊の弾などに当って死んでしまったとしたら，私はどうしても我慢ができません。このことを考えると何もする事がいやになりました。御飯も食べられなくなりました。それで父に相談しましたら，雑誌社へ住所を問合せて，直接お伺いしてごらんと言われましたのでこの手紙を書きました。どうか先生生きていてください」(「絵本」『本とその周辺』)

武井はこの「可憐」な手紙を見て決意したのである。

「折から私は子供を二人うしなって全く生ける屍(しかばね)のようになっていた時だったので，ひどく感激してこの子のためにも生きて働こうと，活を入れられた思いだった」(「同上」)

武井は当時を振り返ってさらにこういう。

「自分ではいい加減不撓不屈のつもりでいても人間なんて仕方のないもので，どうして生きる希望をつないでいいのか，それさえも分からなくなってしまった。いろんな人が手をかえ品をかえて親切に慰めてくれたが，慰められるほど腹が立ってこまった」(同上)

もう一つの「活を入れられた」エピソードは，同じころ舞い込んだ見知らぬ大学生からの手紙であった。そこにはこういう趣旨のことが書かれていたという。

「私はもうずっと前の幼い時から先生の画で眼を開き，美しいものを知り，希望をもって育つことが出来た。この先生が伝え聞くところによるとお子さんをなくされてひどく落胆しておられるという事だが，この事のために先生が再起されないような事があったら，これからのたくさんな日本の子供のためにこれほどの不幸はない。だがしかし非力の自分にはどうする方法もないので，今日明治神宮へ行って心から先生の元気の恢復されるための加護を祈願してきた。同封のはそのお札である」(同上)

これを読んだ武井は「深い感激」を覚え，「こんな人が一人でも世間に居るとしたら，自分は一私事に惨敗してのびてしまっては何としても申訳のない話だ。そうだ，どんなにつらくても私事は滅却して自分は社会人としてまた立上らなくてはならない。なぐられて夢心地からやっと眼が覚め

たような，失神状態に活を入れられたような，強い感激だった。そうしてすっかり気持を入れかえて再起の勇気を取戻す端緒をつかむ事が出来たのだった」（「同上」）

７．おわりに

その後の武井の八面六臂の活動ぶりについては多くを語る必要はあるまい。童話こそあまり書かなくなったものの，戦局の厳しくなる昭和初期も，さまざまな制約の中で創作活動を続け，その後の東京空襲による池袋の自宅全焼や作品，コレクションの消失にもめげず，50歳代の戦後も幅広い活動・運動を続ける。60歳代には児童文化への功績により紫綬褒章を，また70歳代には勲四等旭日章褒章を受けている。81歳の年には，代表作を集めた『武井武雄作品集Ⅰ（童画）』が東ドイツ・ライプチヒで「世界で最も美しい本」としてグランプリを受賞した。かくて晩年になってもその創作意欲は衰えを知らず，倒れる直前まで作品を描き続けたが，ついに1983（昭和58）年心筋梗塞のため急逝した。享年89歳であった。

かくして衰えを知らぬ創作意欲と詩想の源泉は，病弱の幼年期の体験と青春時代に培った好奇心・探求心，知識欲であり，それを反芻してわがものとした強靭な意志であった。

1968（昭和43）年74歳の年，初めて訪れた外国ソ連（現・ロシア）でも，武井の好奇心と探求心は遺憾なく発揮され，帰国後は，その成果も発表されている。武井のよき理解者，劇作家・飯沢匡（1909～94）は，旅行中の武井についてこう書き記している。

「先生と初山（滋：引用者）先生のお伴をして，ロシアへ行った時の先生の大活躍も，私のよい憶出になっている。七十歳代のことなのに，その好奇心というか，新知識への貪欲ぶりは，ほとほと感嘆したものである。特に昔のバルト三国の一つリトワニヤ（引用者：「エストニア」のまちがい）の港町タリーンの中世そのままの城市のたたずまいは，いたく御気に召したようであった」（武井武雄「解説」『本とその周辺』）

あるいは長女三春も同様のことを言っている。

「旅行中，父がいたく気に入ったのは，エストニヤ共和国タリーンの，十四，五世紀がそのまま残されている町だった。／町全体がなだらかな傾斜になっていて，道は複雑に曲がり曲がっているので，幅の狭い道のどこに視点を据えても，あまり遠景のない構図でどこに立っても絵になるのだそうだ。家並みは中世の面白い建築で，一軒一軒異なっている。／屋上の風見の鶏も店の看板も趣向を凝らしたもので，町全体が童話の夢の国のように思えて，こんな国があるとは想像もつかなかったと話していた」（武井三春「父の旅行」『父の絵具箱』）

生涯最初にして最後の海外旅行が，74歳のこの「童話の夢の国」であったというエピソードは，武井の創作人生を象徴して興味深い。

冒頭に記した通り，2013年，ドイツの出版社“TASCHEN”のアメリカ人女性編集者がプリンストン大学の図書館で，1928年に武井の描いた「アンデルセン童話集」の挿絵に感銘，85年余を経た新刊のアンデルセン童話集に計６枚の採用を決め，その本は全世界に出版された。西欧を見たこともない武井の描いた絵が，時空をこえ，普遍性を持っているという証であろう。その現実世界の媒介なしの類まれな想像の世界が，晩年の武井の初めての海外旅行で血肉化・現実化したという奇縁。想像裡の「童話の夢の国」は武井74歳の時，彼の裡にはじめて現実のものとして出現したのである。

さまざまな事由から現実の旅に出ることが少なかった一人の芸術家の，勤勉と好奇心による自身

の「心の旅路」（インナー・トリップ）―その豊穣の例がここにある。それはまた，作家O.ワイルド（Oscar. Wilde，1854～1900）の箴言「現実（自然）は芸術を模倣する」のひとつの証左でもあるのだろう。

注記

注１：blog「武井武雄をあいする会」「武井武雄インタビュー１」，20016.1.
（http://blog.goo.ne.jp/takei-takeo/e/f9827213de67800917eda7d14c1342e6）

注２：注１に同じ

注３：注１に同じ

注４：ただし，黒柳徹子『トットのピクチャーブック』（新潮文庫，1984）では同じ絵が「ぷんぷるぷん」と名付けられており，「がんがらがん」は別絵（同年作）になっている。この別絵は，「悪魔の眼」の代わりに中央に「子供の顔」が描かれ，真剣に花びらを一枚ずつ息で散らしている。周りをとり囲んでいるのは，さまざまな楽器を演奏する子供たちの半抽象の顔である。ただ一人だけが楽器ではなく弓矢を手にしており，中央の子の花を狙っている。解釈の難しい絵である。

主要参考文献

武井武雄『本とその周辺』（中公文庫，2014）
武井武雄『ラムラム王』（銀貨社，1997）
武井武雄『あるき太郎』（銀貨社，1998）
武井三春『父の絵具箱』（ファイバーネット，1998）
武井三春編『武井武雄の世界　青の魔法』（彌生書房，1992）
別冊太陽「武井武雄の本　童画とグラフィックの王様」（平凡社，2014）
思い出の創作絵本「武井武雄」（河出書房新社，2001）
子供之友原画集・３『武井武雄』（婦人之友社，1998）
黒柳徹子『トットのピクチャーブック』（新潮文庫，1984）